

《誕生のピトス》のアテナ像 ー前7世紀ギリシアにおける神話と造形芸術

福本薫(関西学院大学)

ギリシアのティノス考古博物館所蔵の《誕生のピトス》は、前7世紀初頭に制作されたとされるギリシア美術の黎明期を代表する作例の一つである。頸部に表された「アテナの誕生」は、この主題を表す最古の現存例である。画面を支配する大きく腕を広げて座る神の頭から、小さな女神アテナが飛び出すように半身をのぞかせている。発見当初から、この場面の主題解釈をめぐる活発な議論がなされてきた。これが神の誕生場面であることは認められつつも、中央の巨大な座る神をゼウスとするか否かについて見解が分かれてきたのである。ゼウスによるアテナの誕生説をとる研究者 (Schefold 1964, Fittschen 1969, Simon 1980) も一定数存在する一方で、メティスによるアテナの誕生(Brommer 1961)、大地の女神レアによるゼウスの誕生(Kontoleon 1969)など、様々な可能性が提起されてきた。本作を「アテナの誕生」と見なさない研究者たちは、前6世紀にアッティカで成立した典型的な「アテナの誕生」図像に比べ、本作の座る神が女性的な特徴を備えているため、この主題解釈を退けてきた。近年では、この中央の座る神が男神であるという新たな論拠を加えつつ、再度本作をゼウスによる「アテナの誕生」図像であるとする説(Simantoni-Bournia 2004)が提出されている。

発表者は、先行する議論を踏まえつつ、これまでの研究では注目されてこなかった本作のアテナ像に着目したい。多くの研究者が指摘するように、古典文献上で親の頭から生まれる神はアテナしかおらず、その自明さゆえにこの像はこれまで積極的な考察の対象とはなっていない。わずかに Fittschen が、このアテナと、同時期に流布した武装するアテナ立像、いわゆるパラディオン像との類似性を指摘するにとどまる。本作のアテナ像を観察すると、彼女は兜を被り、両手に棒状の物体、恐らくは槍と盾を握っている。兜には高いクレストが付き、兜部分には頬当てのようなものが確認され、小さいながらも明確に武装している様子が見て取れる。このアテナの武装する姿については、造形芸術と文学において、二つの考察すべき課題があると発表者は考える。すなわち、造形芸術上では、同時代のパラディオン像を始めとする一群のアテナ像との比較検討である。高いクレストを有する兜は、早い段階でアテナのアトリビュートとして確立した可能性 (Cohen 1998) が指摘されており、本作のアテナ像にもその可能性があるのかを検討する。

次に文学に関しては、アテナが武装して生まれた、という文言は前6世紀の詩人ステシコロスが初出であるという伝承が残されている。本作は、ステシコロスよりも制作年代が古く、この文言の扱いには慎重を要する (Brize 1980) が、こうした伝承はアテナの驚嘆すべき誕生に古代ギリシア人が強い興味を寄せていたことを示すだろう。上記2点の考察を通じて、前7世紀の造形芸術家たちが始めた神話の造形化という動向の一端を把握するのが本発表の目指すところである。